

は「歴々」の名家の者がなりやすい。しかし口外しにくい「家中」の病なので、あなたも備えとして子孫にこの製法を伝えておきなさい、と述べている。江戸時代前期にはいまだ家筋認識がなく、かつ卑賤の病ではなく、高貴な人がなりやすい病という見方もあったことがわかる。

これに対して17世紀末に書かれた『可正旧記』には、「癩」を家筋の病と見る考え方が登場する。本書は大坂河内国の庄屋可正の手によって、17世紀後半の様々な在地のできごとを記録したものである。その中の「東町常信物語之事」は「癩」の女性の婚姻をめぐる話である。市場町の新右衛門は「諸人の嫌う癩病やミ」だった。その娘も少々「癩」の兆候があらわれていたが、正庵という医師の治療によっておおかた治癒した。娘は正庵のもとに御礼奉公していたところ、東町の弥兵衛に見初められて妻となった。弥兵衛夫婦の間には男子が2人生れたが、20歳を過ぎた頃両人とも「癩」で亡くなり、弥兵衛の家は後継ぎがなく絶えてしまう。可正は弥兵衛について「大なる愚人也」と評価する。なぜならば、まず妻を迎えるにあたっては「血筋のよしあし」を吟味すべきなのに、親が「癩」でかつ本人もその兆候のあったものを承知のうえで妻とすることは「言語道断」である。もし知らずに結婚しても「悪疾の女ハ去ベシ」という「古人の掟」にしたがって離縁すべきであったと非難する。この時期、「癩」は少なくとも庄屋のような上層農民の間では、医学書同様に「家筋」の病と考えられていたことを確認できる。

また『可正旧記』と同時期に書かれた前掲『信州塩尻赤羽家元禄大庄屋日記』には、領主の乳母の父親が「癩」であったという噂について、出身村に命じて真偽調査を行っている記事が載る。武士身分の家筋意識が、このような形で上層農民にまで波及していく場合もあったろう。

以上の事例から「癩」の家筋認識は、いまだ江戸時代前期には見られないが、17世紀後半から、武士や庶民の上層部という「家」を重視する階層に広がっていき、やがて18世紀以降は『莠伶人吾妻雛形』や『摂州合邦辻』に見られるように、社会全体に広く定着していったと考えられる。

しかしながら一方で、『可正旧記』に登場する弥兵衛（常信）がそうであったように、「癩」の家筋とみなされた女性と結婚する人々もいた。前掲片倉鶴陵『癩癘新書』は、田舎では「癩」の家との婚姻を拒否するが、都会では婚姻に際して何よりも「富貴」を問ひ、血筋は気にしないと批判する。実際に「富貴」を問うたからかは判断できないが、「癩」に対する婚姻差別に地域差があったことは確認してよいだろう。

また結婚後に「癩」を発病しても、必ずしも離縁となるとは限らない。山田図南（1749?-87年）『杏花園医案評』（1786年）には、「癩」を病んで数年の「一大夫の妻」の治験記が載る。この女性は武士の妻だが離縁されてはいない。

前掲『癩癘新書』の治験例に登場する相模国の30余歳の男は、ここ一年ほど病んでいて鶴陵の診察を受けた。「癩」と診断され二ヵ月ほどの治療の後に全快、その後子供も生まれて毎年彼のもとに礼に来るといふ。「癩」と診断されながらも幸福な家庭生活を送ったことがわかる。

九州天草郡で、「癩」にかかった百姓が牛肉を入手して取り調べられた事件の史料も、「癩」患者が結婚生活を継続していたこととともに、周囲の人々とも従来通り交際があったことをうかがわせる。1812年、高浜村百姓重作は「癩疾」の薬として「穢多」から牛肉をもらったが、切支丹取り締まりとの関連で、この地域では肉食が禁じられていたために取調を受けた。この時の重作の口書に、